

2021年2月7日 礼拝説教要旨

詩編講解説教47「王の即位の歌」

詩編47：2～10、フィリピ2：9～11

この詩編の講解説教を開始したのは昨年(2020年)の2月2日、2月の第一日曜日でしたから、ちょうど一年となります。一年でおおよそ三分の一を読んできたこととなります。あと二年ほどかけて150編まで読み終えることとなります。一年前の第1編の説教原稿を読んできましたが、コロナの「コ」の字も出てきません。その頃はまさかこれほどまでに世界が大きく変わってしまうとは誰も考えていませんでした。しかしこの一年、世の中も、わたしたちの生活も大きく変わりました。けれども世の中がどんなに変化しようとも、わたしたちは決して変わることをない神さまの御言葉を聴き続けています。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」(1ペトロ1：24～25)この御言葉を思い起こします。コロナ禍でわたしたちの思考や計画は大きく変わりました。このような変化に適応できず、先行きの見えない中で不安を抱いている人はとても多いと思います。でもわたしたちが寄り頼むのは神さまの言葉であり、そこに明らかにされている神さまの救いの計画です。それは決して変わることをない、不変の救いです。そこに自らの人生を委ねることがいかに幸いなことか。この一年、詩編の御言葉を読み続けてきて、改めてそのことを教えられています。

多くの学者が口を揃えてこの第47編の背景にはバビロニア捕囚があると述べています。ユダヤ人にとって捕囚というのは、異教の国々の支配下に置かれることですから、民族としても、また信仰的にも危機的な状況がそこにありました。支配者も生活する環境も何もかも激変するのです。さらには離散(ディアスポラ)と言って、捕囚後にパレスチナに帰還せずバビロニアに残留する人々、ギリシャやローマ、遠くはエジプトに移住する人々などユダヤ人は各地に散らされていきました。その中でどのようにして民族としての同一性を保つのか。信仰の一致を保つのか。それはユダヤ人にとって大きな課題でありました。

そのような背景を考えながら詩編第47編を読むと、その歌の意味が見えてきます。例えば「主はいと高き神、畏るべき方、全地に君臨される偉大な王」(3節)この「いと高き神」という表現は、他の神々の中にあつて最も高い地位を持っておられるという意味です。天地万物をお造りになられたイスラエルの神さまこそ、神々の中の神ということです。また「全地に君臨される偉大な王」という表現は、王の中の王、様々な王の支配の中にあつて、唯一真の神さまのご支配をこの言葉は意味しています。捕囚の民が、異教の神々の中にあつて、また様々な王の支配下にあつて、それでもその上に立つ真の神さまを仰ぐこと。この一点で彼らはその民族としての一致を、そして信仰の一致を保ったのです。ですから、この第47編というのは、真の神さまを神さまと告白する、わたしの主、わたしの王と告白する言わば信仰告白であると理解してもよいでしょう。この信仰告白を持つことが、特にめまぐるしく変わる時代の中でとても大切なことになってきます。

異教の環境に置かれるという点では、この日本社会に生きるキリスト者もイスラエルの人々も同じでしょう。特に八百万の神々を拝むというような宗教的感覚というのは、唯一真の神さまを信じることは大きく異なるものです。そういう中では同じ一つの神さまを信じることは何か排他的で偏狭な生き方のように映ってしまう。八百万の神々を信じるの方が、多様性を

重んじているような、また色々な信仰に対して寛容であるというように感じる人は多い。しかしそれは違います。八百万の神々を信じるというのは、信心深いとか、信仰に対して寛容なのではありません。それはただ自分に都合のいい神を選んで拝んでいるだけであって、そこでの主体は神さまではなく自分です。ある人が「自動販売機の神」ということを言っていました。喉が渴いたら自動販売機を探して飲み物を買う。そういう感覚で神さまを求める。自分にとって都合のいい、便利なもの。そうじゃないときは見向きもしないし、存在すら知らないし求めない。それが信仰と言えるでしょうか。八百万の神々というのは、結局、人間の数だけ神がいる。自己中心的な人間の集まり、その表れなのではないでしょうか。そういう中では、より強い個性やカリスマに人々は惹かれていきます。そこには力による人間の支配しかありません。世の中は様々な支配にあふれています。人間の支配はもちろん、お金や物、このコロナもそうです。人々はそれらに振り回され不安定な歩みをしています。

真の神さまを神さまとするというのは、そういうこの世のものを神とする不安定さから救われることです。神さまを王の王とする。人間の支配も、悪魔も死の力も、その上に神さまがおられる。だから恐れることはない。「諸国の民から自由な人々が集められ、アブラハムの神の民となる。地の盾となる人々は神のもの。神は大いにあがめられる」(10節) ここにある「自由な人々」というのは、様々なこの世の支配に捕らわれないということです。それは神さまを真の王とすることから来る自由です。この信仰が捕囚という現実の中で真に彼らを解き放したので、わたしたちもこの同じ自由へと招かれています。

古来、教会は詩編47編をイエス・キリストの昇天と結びつけて読むことができました。今日はフィリピ書の2章のところを読みました。「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」(フィリピ2:9~11) キリストは真の人となられ、十字架で罪を贖われて、三日目に復活されました。そのようにしてこの世のあらゆる支配、罪と死に勝利されたキリストが天に昇られて、真の神さまとして、天の王座に着かれ、すべての支配の上におられるのです。使徒信条でも「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と告白します。わたしたちはこの全ての頭となられたキリストを礼拝するのです。それは人間の支配ではありません。わたしたちのためにすべてを献げてしまわれるほどにわたしたちを愛してくださった愛の支配がそこにあります。わたしたちはどんなに世の中がめまぐるしく変わるとも、決して変わらない神さまの愛を信じて確かな歩みを続けることができるのです。